



阿蘇くじゅう国立公園

火山と草原、

つながる人の営み

国立公園ものがたり

阿蘇くじゅう国立公園

火山と草原、
つながる人の営み

国立公園ものがたり



火山と草原、 つながる人の営み

国立公園ものがたり

阿蘇くじゅう国立公園と ともに歩む

目次

04 阿蘇くじゅう国立公園

火山がもたらした
のどかな風景

阿蘇

08 [聞き書き] 山村弥太郎さん、山村純平さん、山村美紀子さん

阿蘇の地下水が育む酒が
地域の人たちをつなぐものであるように

12 [聞き書き] 池辺伸一郎さん

おいしい水も温泉も火山の活動から。
すべては自然現象、地球のサイクル

16 [聞き書き] 森本幸司さん

トレイルランナーだからできる草原の
活用と保全を、自ら行い伝えていく

くじゅう

20 [聞き書き] 安部智子さん

タデ原や小さい花々、鳥たち、人々。
くじゅうはいとしいものであふれている

24 [聞き書き] 植木三雄さん

くじゅうの草原環境を守るために
必要なのは人の絆、すべては愛

28 [聞き書き] 指原孝治さん

草原景観が地域の宝。子供も
大人も、みんなで考え守っていく

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。阿蘇くじゅう国立公園は、火山と草原、この全く異なる自然の共存が魅力の国立公園です。阿蘇エリアは、世界有数の広大なカルデラを有し、中岳の火山付近の荒々しさ、青々とした草原の心地よさ、外輪山に囲まれたカルデラ床（火口原）の穏やかさを感じることが出来ます。くじゅうエリアは、九州本土最高峰の山々が連なる火山地形でありながら、南北には高原が広がり、雄大な草原景観を見ることが出来ます。

の美しい草原を放置すればあつという間に森林が広がり、草原や湿原が失われることを知っています。本誌では、自然のための「保護」ではなく、人と自然が共生するために手を入れ「保全」をすることの大切さに気づき、力を尽くす人々の声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本の全ての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめなおし、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることが出来ます。地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。

阿蘇くじゅう国立公園

カルデラに広がる田園は

まるで緑のパッチワーク。

風そよぐ草原は、春は野焼きで黒く

冬は雪で真っ白に。

火山に育まれたこの地には

守りたい命の色が広がっています。

火山がもたらした のどかな風景

日本で最初の国立公園が指定された1934年に阿蘇くじゅう国立公園は誕生しました。南北約25キロメートル、東西約18キロメートルに及ぶ世界有数のカルデラ、阿蘇五岳と周辺の外輪山からなる阿蘇山、その北にそびえるくじゅう連山、そしてどこまでも続く草原など、特有の風景が広がります。今も噴煙を上げる中岳火口付近は荒々しく、草原で牛や馬がゆったりと草を食む眺めは牧歌的。山肌一面をピンクに染めるミヤマキリシマなど火山や草原・湿原に由来する特徴ある植生も、人々を魅了しています。

指定年月日 | 1934年12月4日
面積 | 7万6,289ヘクタール
エリア | 熊本県、大分県

阿蘇くじゅう国立公園の特徴

世界有数の巨大なカルデラと人々が利用し守られてきた草原、そしてくじゅう連山。人と自然のつながりを感じる主なスポットを紹介しします。

人の手で守り、活用されてきた草原

阿蘇くじゅう国立公園に広がる草原や湿原の風景は、自然の営みだけによるものではありません。古くは田畑で働く役牛馬の放牧のため、また堆肥や茅葺きの材料の確保のために、1000年以上前から人の手によって育まれてきました。草原や湿原は放っておくと藪になり、雑木林となり、人の生活だけでなく特有の生態系にも影響を及ぼします。そこで人々は毎年春に野焼きを行うことで草原や湿原を維持しています。保全と活用を繰り返してきた歴史がここにあります。



野焼き

2月、3月に行われる野焼きは草原・湿原とともに特有の昆虫や植物など生態系の維持にもつながります。黒焦げの大地から、新緑が芽吹く香りも阿蘇くじゅうの春ならではの。




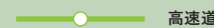




放牧

放牧には、牛馬が草を食べることで草原や湿原の維持に役立つとともに、牛馬も起伏のある土地をのびのび歩き回ること健康に育つという好循環があります。



生態系の保全

草原の植物を食べて育つチョウのオオルリシジミやゴマシジミ、放牧された牛の糞を食べるダイコクコガネなど特有の昆虫類も、草原の維持によって守られています。

-  一般道
-  高速道路
-  JR
-  南阿蘇鉄道
-  国立公園区域(陸域)
-  国立公園区域(カルデラ床、高原、湿原)

※国土地理院地図を元に加工



人の営みがある巨大なカルデラ

世界有数の大きさを誇る阿蘇のカルデラは、約27万年前に起こった巨大噴火によって誕生しました。その後も数万年ごとに噴火を繰り返し、九州全土は火砕流で覆われ、火山灰は本州にまで届きました。長い年月ののち、火山地層で濾過された水が湧き、その水のおかげで人間が定住できるようになり、農耕が広がります。自然のカルデラの中に人々の生活と歴史があるのは、世界でも珍しい風景です。



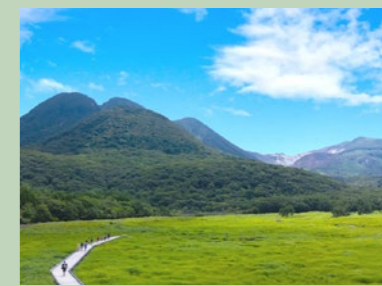
大観峰

北側の外輪山の最高標高からカルデラを一望できる絶景スポット。正面は「阿蘇の涅槃像」と呼ばれる阿蘇五岳、真下の阿蘇谷には田園風景が広がります。



白川水源

熊本市内を流れる白川の水源の一つで、南阿蘇村の湧水群の中でも多くの来訪者を迎える水源。毎分60トンの水が湧き出し、環境省選定の「名水百選」にも選ばれています。



くじゅう連山

最高峰中岳(1,791メートル)などが連なるトロイデ(鐘状)型火山地形、人の手が育んだ広大な草原、タデ原や坊ガツルをはじめとする貴重な湿原などたくさん見どころがあります。

聞き書き
山村弥太郎さん、純平さん、美紀子さん

阿蘇の地下水が育む酒が 地域の人たちをつなぐものであるように



阿蘇の中でも南阿蘇エリアは、清らかな湧水に恵まれた場所。その東側に位置する高森町で1762年に創業し、260年以上の歴史がある山村酒造を訪ねました。ここは標高約500～600メートルの高原地帯で比較的涼しく清酒づくりの南限とも言われます。代表銘柄「れいざん」は神が宿る山（霊山）、阿蘇山のこと。今、この山村酒造で中核を担うのは、都会から高森へUターンした30～40代の次世代3人。豊かな自然の中で育ったエピソードや酒造りについて伺いました。

やまむら・みきこ／1994年、熊本県阿蘇郡高森町生まれ。山村酒造合名会社広報。東京で日本酒のPRを経験し、帰郷。SNSなどの広報も担当。純平の妹で、弥太郎の従姪。

やまむら・やたろう／1976年、同町生まれ。山村酒造合名会社専務、企画広報部長。営業宣伝などのまとめ役で日本酒のラベルなどのデザインも手がける。

やまむら・じゅんべい／1981年、同町生まれ。山村酒造合名会社製造部長、杜氏（とうじ）。歴史ある「れいざん」の味を担う、山村家で初の蔵元杜氏。弥太郎の従甥。

いきものいっぱい、野生の王国 南阿蘇でのびのび育つ

弥太郎 この辺はクワガタやカブトムシがたくさんいて、子供のころは夏休みのラジオ体操の後、虫捕りに行ったもんです。野生の王国みたいなところで、実は僕、虫が嫌いで。友達付き合いで嫌々行っていました。

美紀子 私は、酒蔵の屋根にめっちゃ上ってました。冷蔵庫の前のコンテナに上がり、そこからトタンに上がり、見つかったら怒られて。野生児みたいな友達と一緒に水道管で作ったような細い橋を渡ったり。あのときはよく怪我しなかったな。人が渡っていいはずないんだけど。おてんばでした。

弥太郎 農業用水を引くパイプのでしょ。まあ今でも、おてんばですわね。
純平 山の中で友達と秘密基地を作りましたね。キツネやサルと遭遇して、逃げ回ったり追っかけたり。野生動物が結構身近にいた記



弥太郎さんが小学生のころ、遠足で登ったという阿蘇五岳の一つ、根子岳（ねこだけ）。ギザギザの山頂は侵食による岩の露出だが、神様に叩かれたという伝説も。



「2時間飲み続けてもあきない」といわれ、さまざまな食に合う『れいざん』の酒。写真は純米酒（白）、本醸造（赤、青）、粹撰（ベージュ）。

憶があります。小学校で「ウサギ追い」っていう行事があったな。

弥太郎 山の上で大人が網を張って待ち、下で子供が一列に並んで、音を鳴らしてウサギを追うんですよ。

純平 ウサギを捕まえて、檻につめ込んで。
弥太郎 俺らのときは、鍋にして食ってたからね。

純平 ウソ！
弥太郎 今思えば食育。熊本市内で話したら驚かれたから、この辺の習慣かもしれない。

造り酒屋の放蕩息子とおてんば娘 「飲み手」から酒の世界に入る

弥太郎 高校は熊本市内に行き、高森に住んでいたのは中学まで。3人ともそうで、この辺はどうしてもそうなっちゃう。

酒蔵を嫌だとも思わなかったけど、やりたことも思ってた。学生ときに利酒師

の資格を取ったけど、酒蔵出身だしネタになるから。

美紀子 親も子供たちに帰ってこいって言わなかった。

弥太郎 この仕事も悪くないぞ、的なことを遠回しに言われた記憶はあります。幸いうちには、昔働いてた蔵人も含めて、楽しそうに酔う大人ばかり。そのきっかけがお酒というもので、それは大人しか飲めないもの。そこから、いいなお酒、なんか楽しそうだなって憧れのようなものになりました。

美紀子 杜氏（純平）は若いころ、蒸留酒ばかり飲んでましたよ（笑）。

純平（笑）。二十歳くらいのときに記憶をなくすほどの酒を飲んで、激しい二日酔いになっちゃって。なんで日本酒はこんなに悪酔いするんだと。そのころレストランバーのアルバイトで、パーティーのようなことをやりました。そこで煌びやかな横文字の、茶色や透明の40度ぐらいあるやつに魅了されて、俺は日本酒じゃなくてスピリッツだと。そのとき「れいざん」のお酒はあまり好きじゃなかった、申し訳ない。

弥太郎 最初に飲みすぎて苦手になった。定番ですわね。

純平 大学卒業してからもバンドマンに憧れていろんなライブハウスでライブしたり、はっちゃけたり。もう本当に体を壊しそうなのが破滅的な生活。朝まで飲んで、そのままライブして、また飲んで、みたいな。しばらくして、父からいい加減真つ当な道を歩めと。放

山村酒造のシンボルだった煉瓦造りの煙突。以前は高さ約15メートルあったが、熊本地震をきっかけに低くした。



蕩息子でした。

美紀子 父親から「酒造りしないか」と直接言われたのは兄（純平）だけで、山村家で初の杜氏なんです。

純平 酒造りを経験しろと言われてたけど、帰ってこいとまでは言われなかった。福岡で『萬代』の酒蔵に放り込まれ、下働きから始めて酒造りの勉強をするうちに、日本酒って実はこんなにおいしいのかと。大吟醸や純米吟醸を知って、こんな素晴らしいものだったのかと知りました。飲み方もその社長から教わって、それがきっかけで「れいざん」のおいしさにも気づけた。5年修業して「れいざん」に戻り、2015年杜氏になりました。
美紀子 私は大学で上京して、日本酒を飲み始めたのは25歳ごろ。日本酒好きな友人が、飲んだ帰り道いなくなるので「日本酒やべえな」と思った。少しは勉強しておけよと親から種を蒔かれたのもあって、日本酒バルで



萬延元年(1860年)に建てられた「萬延蔵」で、伝統の味を守り酒造りに励んでいる。

52の軟水で酒造りに適していて、水にあやかっていると思う。その水を台無しにしないように、蔵をきれいにし、菌の働きを助けています。酒を作るのは菌で、人は助けるだけです。

美紀子 何のお米を使うかより、どんな水を使うかのほうが味に影響するとも言われます。

弥太郎 阿蘇のお水も水脈によって違って、火山の火口のほうに行くと鉱物などの影響で硬めになったりする。高森は源流に近く、本当にソフトでクリアな最初のお水がただだけ。うちのためにあるんじゃないか?と思える。だから蔵として残れたのかもしれないですね。うちの酒は伝統的で、よく言われるのは2杯目、3杯目もうまい。



「いとこ以上兄妹未満」という弥太郎さん(中)と、純平さん(右)美紀子さん(左)兄妹。掛け合いから仲の良さが伝わってくる。

ごく思います。

弥太郎 僕は高校からバンドをやってました。大学生のとき、オーディションに合格し、新宿リキッドルームで東京スカパラダイスオーケストラと一緒にライブをやらせてもらって。初めて1800人ぐらいスタンディングの箱でめちゃくちゃ楽しくて、その流れで音楽業界に入りました。憧れの世界で、裏方の仕事も好きでした。

27歳のとき、いろんなアーティストが出演するイベントがあり、ノリで「弥太郎の酒を置こうぜ」という話に。当時は樽酒もよくわからず、とりあえず親父に送ってくれと電話しました。会場に鏡開きの樽が届き、アーティストたちに振る舞い酒を注いでいたら、僕も純平も大ファンのアーティストが「これお前とのこの酒なんだ、いい酒だな」と。震えまじか!うちの酒、いい酒なんじゃないか!と急に誇らしくなって。憧れの方だったから本当にうれしかったです。

それから、音楽と日本酒は親和性が高いと感じるようになりました。どちらもエンターテインメント、なくても死ぬもんじゃないけど、あったほうが楽しい。「表現としての日本酒」というとちょっと格好つけすぎですが、うちの仕事も悪くないな。そのころがターニングポイントでした。

美紀子 「れいざん(山村酒造)」に帰ってきたのはみんな30歳前。

弥太郎 ありがたいことに、どちらの親も跡継ぎのプレッシャーをかけずにいてくれた。

美紀子 1杯目の乾杯より、飲んでいるとやっぱりこれがいいなっていう。ずっと先祖が守ってきたもの。

純平 派手さはないですが。

弥太郎 この場所で酒蔵を260年以上やってこれた。誇りに思います。

美紀子 国立公園である阿蘇を大事にしたいって思う方々とのつながりを、今すぐく提供してもらっています。今後は食の方や農家の方と小さなイベントを実施したり一緒に開発するなど、広い視野でやってみたい。それが恩返しかと。

草原再生協議会の活動を見て、勉強させてもらって、人間が活動していかないと自然も朽ちていくと本当に感じました。そういったことを大事にする人たちが集まるところで、私たちも一緒に動いて、阿蘇を大事にしたいことが重要だなと思っています。

弥太郎 阿蘇山は神様が宿る場所でもあるわけ、いろんな神事や祭り、直会があります。人が集まる場所の傍らに、うちのお酒があったらうれしいです。お酒は人をつなぐツールだと思おうので。

美紀子 インターネットの普及でどこでも人とつながれる時代が長く続いています。災害や何かがあったとき、ローカルで帰結しているのを感じます。阿蘇の人が阿蘇で食べることがすごいことなんじゃないか。今後ももっと強まっていく気がします。私も、阿蘇の中で動く人たちと一緒に、っていうのをいちばん大事にしたいです。



南郷谷から望む阿蘇南側の外輪山。山々が暮らしのすぐそばにある。

識しています。

純平 小学校の校歌に、世界に誇る大阿蘇っていう歌詞があった(笑)。

弥太郎 この景色も僕らは見慣れています。驚かれることが多いし、日本の中でも特別な景色だと思おう。

阿蘇は北側と南側で、景色が違いますよ。南側は平野が広がらないので山が近く、雲の影が動くのがダイナミックに見える。北側の街のほうから見ると、逆光で稜線がはっきりして、ただ山肌はあまり見えないので神秘的。静と動、二面性のおもしろさがあります。まだ知られていない阿蘇、多分僕らも気づいていない阿蘇もあると思う。

阿蘇の水が育む酒で阿蘇の人々をつながり、ともに生きる

弥太郎 やっぱりお水ですよ。日本酒は80%が水ですから、その豊かさは本当にありがたいばかり。水道の蛇口からミネラルウォーターが出てくる場所だから。

純平 私は逆に、ペットボトルの水を飲んで腹を下しました(笑)。

酒造りは、本当に水の恩恵を受けています。器具の洗浄から加水まですべてにこの水を使いますが、商品となってお客様の手に渡っても清らかな味わいが損なわれません。劣化しにくい酒だと思えますね。

水は地下水で、生活用水でもあります。水道も同じ水脈からで、豊富に使えます。硬度



「この水のおかげで、『れいざん』がある」と敷地内で湧水を祀り、日々感謝を欠かさない。

聞き書き
池辺伸一郎さん

おいしい水も温泉も火山の活動から。 すべては自然現象、地球のサイクル



20代後半で東京から帰郷し、阿蘇中岳の火口から3キロメートルに位置する「阿蘇火山博物館」に転職した池辺伸一郎さん。ある夜、思い立って火口をのぞき込むと、その奥底には赤く轟々と燃える「地球の火」がありました。その光景に心奪われ、以来40年以上阿蘇山の調査・研究に関わり続けています。その半生と阿蘇火山の独自の魅力、また長い間阿蘇という大自然に触れてきたからこそ言える、大切なこととは。

いけべ・しんいちろう／1956年生まれ、熊本県熊本市出身。鹿児島大学理学部で火山や地質、地球物理学など学ぶ。東京の地質調査会社に勤務後、1984年「阿蘇火山博物館」へ。熊本大学との阿蘇山に関する共同研究にも関わる。2000年から博物館長を務め2024年退任。現在は博物館の学術顧問であるとともに一般財団法人自然公園財団阿蘇支部所長を務める。自然公園の維持管理のほか、自然とのふれあい活動体験、防災講演会など社会教育にも力を注いでいる。

空から見た「変な地形」 それがカルデラだった

子供のころは親が転勤族でよその県に住んだこともあり、阿蘇は身近な存在ではなかったですね。ただ校歌にはよく「阿蘇の山」が出てきていて。高校の同窓会ではいまだにみんなで歌いますよ。子供のころは星が好きで、小学校上がりがたてぐらいに父親に星の本や天体望遠鏡を買ってもらい、屋根に上がっては星を見ていました。それが自然への興味の始まりですかね。

鹿児島大学の理学部に進学しました。私が鹿児島にいたころ、桜島はほぼ毎日噴火していましたがね。火山学も学びましたが、あのときは研究したいというより、卒業する

ための単位の一つとしてでした。就職は、東京の地質調査会社でした。先生から人を探しているが行くかと言われ、嫌とは言えず受けたいから採用されました。熊本空港から東京行きの飛行機に乗り、空から地上を見たら、なんかすごい変な地形があつて。あとで調べたらそれが「カルデラ」だったんです。あんなに陥没している地形が、上空からちゃんと見えたんでね、すごいなと思いましたね。今でこそ地形を立体的に見せる地図はありますが、昔は等高線を見ながら凹凸を想像するだけでしたから、実際に見えたっていうのはおもしろかったですね。

理学部で地球物理と地質の両方やったけど、地質調査会社で必要だったのは土木工学でした。東京は軟弱地盤で、ボーリング屋さんの調査に我々コンサルタントがいるんな数式を入れながら、1平方メートルあたり何トンぐらいまでの荷重をかけられますよと報告するわけです。建築のために。そこで土木工学を深掘りしていくか、せつかく大学で学んだやつを活かすか、どうすっかなと思ってたときに、「阿蘇火山博物館」で人を探しているって聞きました。博物館だったら大学で学んだことが活かせるかなと。いざ熊本に帰るかとも思っていたので、転職を決めました。

ところが火山博物館はバス会社で作った民間の博物館で、収益重視でした。まずお客さんをたくさん入れないといけない。仕事はチケット販売に売り上げの報告、事務作業など。日ごろのルーティンワークの中で本当に自分

がやりたいことはできない。仕事は仕事、自分のやりたいことは夜や休みの日にやる、しようがないと諦めました。

赤い「地球の火」を見て 阿蘇山に心奪われる

1ヶ月ほどだったころ、博物館の火口カメラの映像を見ていたら、ふと、現物を見にいかんといかんと思いました。大学で担当の先生からしつこく言われたことで、地形地質をやるのにフィールドワークは大事なんですよ。実際に現地で物を見て、それをベースに本を読んだり人の話を聞いたりしないと、身につかない。「現物の火口を見にいかんといかん、これは使命だ」と直感した。

真っ暗闇の中、懐中電灯を持ってひとりで行きました。怖かったですよ、断崖絶壁ですし、今は立ち入り禁止区域です。火口に渡る橋のそばに小さな祠があって、そこで「安全に帰ってこられますように」とお願いをしました。

火口の緑からのぞき込んだら、赤いマグマが動いているように見えました。実際はマグマではなくてガスが、赤だっったり黄色かったり。ガスコンロみたいなもんです。そのとき、「地球の火が見えた」と思いました。人工的な火や焚き火じゃなくて、地の底から湧き上がってくる火。なんというか、心を奪われました。火山の色に染まるというか。後々考えるとあれが転機だったと思う。



直径約1キロメートルの火口跡に草原が広がるのかな草千里ヶ浜。国の名勝および天然記念物に指定。

さすがに最初の日は、写真撮ろうって余裕はまったくなく、とにかく見るだけでしたが。社会人になってそういう経験をすると、もっと知りたい、もっと勉強せなやかんと。そうやって考えていくのが本当の勉強なのかもしれないですね。

熊本大学・渡辺先生との出会い 火山と博物館に腹をくくる

そのころ、熊本大学の渡辺一徳先生と出会いました。ご自身で作られた地質図を、博物館に置いてほしいと言ってこられたんです。お会いするまで知らなかったんですが、阿蘇火山研究の第一人者だった。その渡辺先生が、私のような半素人にもいろいろ教えてくれたんですよ。質問をするとお前もうちよっと勉強せえって言うんじゃないか、「いやそれはね、こうだと思っよ」って。渡辺先生との出会いは大きかった。



火山灰に覆われた砂千里ヶ浜。荒涼とした砂地に遊歩道が整備されています。



「火山が噴火するというのも、一方ではきれいな湧水や温泉につながっているんですよ」

もつといういろいろ聞きたくなって、ときどき熊大に通うようになりました。逆に先生は先生で熊大にいたので、常に阿蘇の火口を見られるわけじゃない。私はいつも阿蘇にいるので、噴火で飛ばされた火山灰を取ったり、火口カメラで撮った活動状況の変化を見ることが出来るわけですね。何日の火山灰取りましたよって自慢気を持っていくと、先生喜んでくれるんですよ。「活動の様子が変わってきたね」って。「一緒に顕微鏡で見ようか」って。

そんなことを日々やっているうち火山灰の変化がわかってきておもしろくなりました。現場の状況と火口カメラの映像を突き合わせていくと、表面活動の変化と火山灰の様子が連動して変わるのが見えてくるんですよ。対比させていくと、すごくおもしろい。そんな話を先生といろいろしていたのは楽しかったですね。

本当は火山学だけでもやらなくちゃいけないことがいっぱいあるんですけど、一緒に博物館

館のことも勉強しなくちゃいけない。博物館の役割ってすごく大きくて、資料や情報を収集して、保存しておくのがいちばん大事なんですよ。それについて調査、研究もする。そこで得た知識を形にして、展示して、そのサイクルをずっと回していくのが博物館です。大学の先生は研究を一生懸命やって、俺たちはそれを追いかけていく形で一緒に研究をさせてもらう。それ以外に普及活動も博物館の役割として大事。博物館のことと火山のこと、二本立てで考えていこうと、このころ腹をくくりました。

「わからんことがたくさんある」それが阿蘇、火山のおもしろさ

阿蘇のおもしろさは、まず火口の近くまで人が行けて、活動の様子を見やすいこと。もう一つのおもしろさは火山としての特徴っていうか、阿蘇に限らずどこも一緒だと思うんだけど、いわゆる地球科学っていうのは、わかってないことがいっぱいあることですね。

地の底のことを考えなくちゃいけないし、それが上がってくるメカニズムも考えなくちゃいけないし、表に出て溶岩になり、火山灰になる過程も考えなくちゃいけないし。それが地形にも反映してくるし、そこに暮らす人の生活が関わってくる。人の生活が入ってくると考古学や歴史、ここの山にあるような草原とかそういったことも一緒に考えていかないと。阿蘇火山を知るためには、もうちょっと

啓発や、専門の先生に来てもらって講演をしてもらおうことも、もつと頻りにやっていくってことも一つの使命かなと思います。

子供たちに話をすると、噴火は怖い、水はおいしい、温泉は楽しい。ちゃんとわかっているけど、水がきれいなことが、噴火の恵みであることとはつながっていない。噴火するからこそ恵みがある。きれいな景色も見える。怖いことも、ずっと辿っていくと自分たちの生活に役立っていることがたくさんある。そのつながりを子供たちにしっかりとわかってもらいたい。

阿蘇にいと噴火だけじゃなく水害があったり、崖崩れがあったり、地震もあった。自然災害に対して、噴火は悪者、地震は悪者、そういうふうな思ってしまうんだけど、これらはあくまで人間側からの見方に過ぎない。例えば阿蘇の火山は5年か10年に1回は噴火する。台風は毎年やってくる。大雨も毎年やってくる。この間みたいな大きな地震は2000年に1回くらい。それぞれに、おおよそのサイクルがある。そういう自然現象なんです。人間の時間スケールは頑張って100年。災害にするかしないかというのは、人間の関わり次第ですから。地球は、地球の営みをしているわけです。そこに人が住み始めたから、人が自分の生活に迷惑を被ると災害だというんだけど、それは地球が悪者ではなくて、俺たちがどうにか考えなくちゃいけない。こっちは地球に合わせていく。防災というのはそんなものかと思えます。



池辺さんが自然公園財団阿蘇支部で行っている「自然ふれあい活動」の様子。写真提供/池辺伸一郎



中岳第一火口。活火山の火口をのぞき込むことができるのも、実は稀有なこと。

と広いところで知つとかないと話ができない。次から次に調べれば調べるほど、わからんことがたくさん。阿蘇独特の性格、性質があつて、それ自体も奥深く、付随するいろんなテーマが深く関わっているっていうのは非常におもしろい、魅力があるところかなと思います。阿蘇は、やればやるほどわからなくなる。

わかっていくと、それはそれでおもしろい話だね。地層がいくつも重なっているみたいに、阿蘇にはいろんなものがいっぱいある。**地層一枚、石一個に物語がある**
噴火は恵みとつながっている

地層だってそうです。火山灰の地層、何か削れて川が作った地層、まあいろんな地層がある。地層一枚とっても、どっかその辺に落っこつてる石一個とっても、ここまで辿り着くストーリーがある。そういったものを考えていくのもおもしろいじゃないですか。

地球が生まれて46億年からすると、人間の700万年なんてほんのちっぽけなもの。旧石器時代から縄文ぐらいまでは、自然の営みの中の一部として生きてきて、弥生ぐらいに

「阿蘇の蹴破り伝説」というのがあります。昔カルデラに湖があつて、外輪山の一部を神様が蹴った。そこから湖の水が流れ出して、カルデラの中で人が農業できるようになった。その神様が阿蘇神社の健甞龍命たけわたりのみことっていう話。なんでそんな蹴破り伝説があるんだろう？ここに人が住み始めたのは3万年、4万年前からですね。3万年前ぐらいの話を、そのころの旧石器時代の人がそういうふうに見てたかっていうとわかんないですよ。でも神話なり伝説なりが残っていると、意外と事実と合っていると結構ある。火山学的な流れと神話の話を一緒にしていくと、そこに人の生活が見えてくるんですよ。俺の知らない神話の世界とか民俗の世界とかを掘り下げていくと、もうとてつもない時間がたつて何もできなくなるんですけど、でも



自然公園財団阿蘇支部では、草原の成り立ちや阿蘇の歴史など、さまざまな情報を発信。

聞き書き
森本幸司さん

トレイルランナーだからできる草原の 活用と保全を、自ら行い伝えていく



九州の山々やカルデラ内の街並みを360度見渡せる大観峰。阿蘇くじゅう国立公園の中でも有数の眺めです。森本幸司さんが運営するトレイルランニング大会では、この風景の中を走ることができます。森本さんは日本代表にも選ばれるトレイルランナーでアウトドアブランド「ザ・ノース・フェイス」が支援する国内アスリートの一人。阿蘇を走る魅力だけでなく、保全の大切さも語ります。

もりもと・こうじ / 1980年生まれ、熊本県阿蘇市出身。1998年「第53回かながわ・ゆめ国体」に山岳競技で出場し少年男子で優勝。「九州一周駅伝」に熊本代表で8年連続出場後、トレイルランナーに転向。2015年「ウルトラトレイル・マウントフジ STY」準優勝、「霧島・えびの高原エクストリームトレイル」優勝、2017年「Aso Round Trail」優勝、2019年「IAUトレイル世界選手権」日本代表など。2022年から阿蘇でトレイルランニング大会を企画運営。

カルデラで生まれ育ち、「丸の中」が僕のエリア

カルデラの中で生まれ育って、阿蘇山がこっちに見えたりあっちに見えたりするのが普通でした。カルデラとか外輪山というのを意識したのは10代になってから。地図や上空から見たとき、この中で生活しているんだなと思ったし、「この丸の中が僕のエリアだ」と感じていました。

小さいころは稲刈りの終わった田んぼで、友達と野球やサッカーをしてよく遊びました。足は仲間内では速いほうでしたが、特別ではなかった。中学、高校と陸上部で、高校3年生のときに神奈川で開催される国体で山岳競技に出場しました。山を走るレースがあるからやってみないかって陸上の顧問の先生に勧められて、挑戦してみました。結果翌年に熊本国体を控えていたので、地元で結果を出さずには強化していません。結果が出ればいいなと思ったら、たまたま少年男

子で優勝しました。国体で優勝できるようなことに誘っていただいていたのがたまたまな思っています。

今思えば18歳のこのときにターニングポイントというか、原点です。当時は登山マラソンと呼ばれて、山を走る人もほとんどいなかった。今みたいにかっこいいスポーツって感じじゃ全然なくて。まさか将来自分が山を走って、こういう人生になるとは思っていなかったですね。

ところが、国体の山岳競技に数回出場していたら、逆に陸上の5000mやフルマラソンの記録が伸び出したんです。高校生のときめちやくちや練習してもう嫌だと思ったりきより練習量は少ないのに、楽しくて自分からやりだしたらすごい記録が伸びた。それでもうちよつとマラソンを速く走りたいと思うようになって。2000年から2005年くらいまでは山岳競技もやりつつ陸上もやっていました。

国体の山岳競技がいったんなくなつてからは駅伝やマラソンに集中しました。しばらく「九州一周駅伝」を目標に走っていた感じですね。九州一周駅伝は、1000キロを24人で10日間かけて走ります。8年連続8回、熊本県の代表に選ばれ走らせてもらいました。年齢でいうと25歳から33歳くらい。その8年間を、毎日努力して、選考レースを勝ち抜いて、本番を迎えてついでにそのために費やしました。終盤のほうは選ばれなければという義務感で、結構疲れていましたね。この

駅伝の大会が終わると聞いてホッとしたというか、もう頑張らなくていいんだと思っ

走り続ける中で気づいた 「阿蘇の景色ってやっぱりいい」

2013年に九州一周駅伝が終わり、もっと気楽に、違うことをしてみようと思ったら、トレイルランニングがやりだしてしまいました。今振り返ると走ることが途切れないように、タイミングが合っていましたね。トレイルも、最初は結果を求めていたわけじゃないけど、どうしてもアスリート気質が出るというか、負けたくない。いろんな大会に出はじめたら、ありがたいことにある程度納得できるような結果が残せるようになりました。日本代表でポルトガルなど世界大会にも行けたし、「ザ・ノース・フェイス」が活動を支援してくれています。

各地のトレイルランニングの大会に出るうちに、「阿蘇の景色って、やっぱりいいんだな」と気づきました。阿蘇に帰ることが減っていたんですが、たまに帰ると、何か感じ方が違う。景色であるとか、温泉があることとか、昔のここでの生活って、実は特別なんだなって。熊本で旅行するといえど阿蘇じゃないですか。有名なんで、自分が育ったところって、結構いいところだなんて思い直しましたね(笑)。

競技をしながら地元が目が向いたころ、トレイルランの大会を企画運営するベンチャーか



日本代表として出場した「トレイル&マウンテンランニング世界選手権 2023」。写真提供/森本幸司

ら、「阿蘇で大会をやるなら森本さんが適任じゃないか」と誘いを受けました。それまでは熊本県の職員だったので悩んで。結構長い間考えて、2022年に転職を決定しました。今は、阿蘇の北側から南側まで110キロ走るトレイルランニングの大会など年間通して5、6本やっています。(阿蘇ホルケーン/トレイル、阿蘇トレイル女学院、南阿蘇カルデラトレイルなど)

仲間と一緒にやっていますが、大変なこと多いっぱいありますよ。国立公園であることや草原の成り立ち、野焼きをする牧野(ぼくや)のこと。大会をさせていたただくうえで許可をいただいたり理解していただいたり。走るだけじゃなくて、地元の方々に還元できるようなことであるとか。そういうところが、大変でもやるべきことかなってというのが見えてきたところですよ。

そうして初めて、ここが「国立公園」だというのが、理解できた感じはあります。ふつうに生活していたら考えないと思いますが、



田んぼの向こうに外輪山がある、森本さんが子供のころ慣れ親しんだ風景。



「転職1年目にしっかり地道な活動ができた」と語る森本さん。

なぜ国立公園か、その成り立ちなど自然と目が向くようになりましたね。まだ勉強中ですが深まっている感じがあります。ただカルデラの中にいるっていう認識だったのが、今は国立公園という貴重な場所の中にいるんだなと思えます。

風が雨を運んでくる。「循環」を感じる

阿蘇の魅力は、風と水だと思っています。街中と阿蘇では、受ける風が違う。水も湧き出しておいしいし、お米もおいしい。夕方走っていると、ちょっと風が吹いて田んぼの稲がなびいたり、朝だったらその風で朝露が落ちたり。走りながら、そういうのが見えるようになってきた。

結構雨も降るんですよ。カルデラの遠くのほうで雨が降っているのが、風が吹いて、その雨雲がだんだん近づいてくる。風が雨を運んでくる。その水によって、野菜やお米に栄養、力が入る。地面に染み込んで、それが回っ

てくるようなそういう循環を感じますね。走ることもそうなんですよね。自分で走るためにエネルギーを入れたり、水分を取ったりして、それが力に変わってまた前へ進める。阿蘇の景色も、地元の人が管理し受け継いで、野焼きを1000年以上続けてきてこの景色がある。何でも循環だと思おう。

その中で僕らがこうやって走らせてもらえている。ただその景色がきれいとか気持ちいいで終わらんじやなく、走らせてもらうことよって、たとえば参加費の一部を地元に戻元したり、体力があるトレイルランナーたちが野焼きや輪地切り(※)のお手伝いをしたり、僕らもちゃんとその地元でそれを続けている人たちのことをリスペクトして1000年の循環の一つに入れたらいいなと思って今やっているとこです。

もちろん最初から何かお手伝いしようと思って来たわけじゃないですよ。走って、いろんな方と出会って、地元の方やグリーンストックさん、環境省さんなどいろんな人とお話しする中でようやく気づけたことです。大会でも、草原がたきれいなだけじゃなくそうやって守られてきたのを、参加する人知っていたら一つ一つのきっかけになればいいなと思ってやっています。そして自分にもできることがあれば、手伝いに来てくれる人が一人でも増えていけばいいなと思っています。

※ 野焼きを行う際、草原の周囲にある雑林地や建物などに延焼しないように「輪地(わち)」という防火帯をつくる作業のこと。

トレランも草原の保全も一歩ずつ前に進めばいい

トレランもそうですが、いきなり100キロのレースを走るのはなかなか難しいじゃないですか。僕も走りだしてすぐゴールのこぼかり考えると、全然行き着かない。本当に一歩一歩進むこととか、いったんあの頂上まで頑張っただけでみようととか、それが結局ゴールにつながるっていいような感じで、一歩ずつです。途中にトラブルやら挫折しそうなことやら、いろんなこともありですけど、ひとつずつ細分化して、じゃあいったんここまですべてやってみようという感じですかね。

阿蘇の草原って基本的にはどこも走ってはいけない場所だと思っただけです。公共の場所じゃないから、どっかの草原はどっかの牧野さんが管理している。そこに入ったら、人んちの庭を勝手に走ると同じなんです。

国立公園っていうと普通の公園みたいに聞こえるけど、実際は持ち主がいる土地ばかり。放牧されている方もいれば今はもういない方もいるけど、基本的には許可をいれなければいけません。仮に、こういうルートで行きたいっていう想定を立てても、ここからここまでのオーナーさんはいよいよって言ったけど、この先はダメっていうこともある。

ただそういうときに限って、新たなチャンスや助けが入ったりするんですよ。たとえば、このエリアはもう通らないでと地元の方から言われたとき、じゃあどこが通れるかと探

100点じゃないけど、自信を持ってサミットができる確信がありました。草千里も、火山も、そこに行けばみんな「おおっ」となるのわかってたんで。

実際に目で見て初めてその良さがわかるような体験ができる。まさに国立公園はそういうところだと思っただけです。ボルケーノトレイル大会も全国から来てくれます。少しでも機会を増やして、阿蘇を知っていただきたい。

僕らは走って終わりじゃない。トレイルランナーができること

環境省さんともお話ししますが、国立公園には景観・環境を守る法律があったりするので、なんでも勝手にできないじゃないですか。ただ守るっていうのと反対に、どれだけの人に来てもらうかもある。保全と活用というか、最近いろんなところで話すのですが、守りつつ活用していくっていうのに重点を置いていきます。トレイルランニングは活用するほうですけど、走って終わりじゃダメ。しっかりと保全、守るほうと両輪でやっていこうと伝えています。

例えば高齢化の課題がある地域で、草刈りしたいけどなかなか足が動かんみたいな話を聞いたら、僕らみたいな人間は、めちゃくちゃ斜度がある場所も喜んで行きますよ。トレイルランニングにもなるし、「この傾斜はなんだ!」とワクワクしますね(笑)。トレイルランナー



朝日を浴びる外輪山。「この景色はここだけ、世界に誇れるものです」

して話を聞いているうちに、こっちは通れるかも?という道が見つかったり、なにか助けてくれる人が現れたり。でもうまくいっていきそうだけど、逆に気をつけないと。落とし穴じゃないけど、ガツンとやられるようなことがあるので、あまり調子に乗らないようにしています。なんでも、一歩ずつね。

「ザ・ノース・フェイス」からサポートを受けるアスリート仲間が、年に一度集まって日ごろの活動やブランドの考え方を共有するアスリートサミットというのがあります。それを「ぜひ阿蘇でやりたい」と言っていました(笑)、2024年に実現しました。日本各地にいるアスリートとブランドのスタッフが全部で50人くらい来て、この阿蘇の景色や、僕がやっているのを見てもらい、みんなで登山道の整備もしました。この阿蘇を、本当にみんなに見てもらいたい。見てもらえるだけの自信がある。天気さえ良ければ



公益財団法人阿蘇グリーンストック主催の野焼きボランティアにも参加。写真提供/森本幸司

は損得勘定じゃなく、自分が遊ぶ、感じるところにすごく意識が高いので。もちろん安全には気をつけて行きます。

トレイルランニングの大会のスタートライオンなんか、みんな仲間って意識で立つんです。最初は誰よりも速く走ろうという気持ちもあるかもしれないけど、レース中はきつくて「どうして自分はこの大会申し込んだんだろう」と思うような苦しい場面があるんです。そんなとき、隣のひととちょっと話さず元気が出ることもある。ゴールするころには見ず知らずのひとと友達になっている。長距離レースが多いのでお互いのことを話す時間があるんです。いろんな人と仲良くなって同じ景色を共有できる、いいスポーツだと思います。

ただ繰り返しになりますけど、僕らの使命は走って終わりじゃない。走ったら本当に道が荒れたりもする。そういうところを、しっかりとリカバリーするのが大事だと思います。一歩ずつ、そして地元の新しい風になればと思っています。



カルデラを望む大観峰周辺も「阿蘇ボルケーノトレイル」の一部。コースは写真中央の根子岳付近まで続いている。



九重星生ホテルから歩いて約15分のところにあるタデ原湿原。その入口に長者原ビジターセンターがあり、タデ原やくじゅう全体の自然と歴史について紹介している。

聞き書き
安部智子さん

タデ原や小さい花々、鳥たち、人々。 くじゅうはいとしいものであふれている



登山客でにぎわうホテルを 夜中まで手伝った子供時代

この辺りはもともと温泉地で、牧の戸温泉、そしてこの星生温泉があります。星生温泉はうちのホテルのお湯だけで、昔鷹狩りのお殿様が見つけた湯治場だったようです。今年（2025年）、当館は70周年を迎えました。母が26歳のときに山小屋を買ったのが最初で、そのときは独身で中学校の先生だったんですよ。思い切ったことをしましたよね。なぜ「旅館」という商売をしようと思ったの？って、母が生きているうちにちゃんと聞いておけばよかったです。

その山小屋が火事になって、建て直しに来た人たちの中に父がいて、出会ったそうです。6歳年下ですね。家族はほかに、兄と弟がいます。周りには何もなくて、あるのは自然だけでした。それが嫌ではなかったけど、自然の中を走り回った思い出もあんまりないんです。近所に子供がいなかったから。

子供のころから、お手伝いというより旅館を回す人員に、きょうだいなぜか私だけ入っていました。従業員の方たちと一緒にやっていた感じです。登山客のお弁当を、100個、200個とみんなで夜中まで頑張って作った記憶があります。炊きたてのご飯をうちわであおいで冷やして、今となっては楽しい思い出ですね。ご飯もみんな一緒に、多いときは14、15人で食べていました。

昔は登山客も多くて、すごくにぎやかでした。春の新緑のシーズンと夏のシーズン、紅葉の時期もとても忙しかった。そして冬場は、シーンとなる。今でもそうですが、冬は本当に静かでシーンとしています。両親が結婚してホテルを始めたころは、「冬は人がいなかったから、飯盒でご飯を炊いて、二人で食べてたわ」って。その割に、いつも言い合いをしてましたけど。

年に1、2回、父と兄、弟と山にも登りました。三俣山とか久住山とか。弟が高所恐怖症で、後ろ向きに降りていましたね（笑）。そのころ、山の上に売店があったんですが、父はお金を持ち歩かない人で、何も買えない。みんなでプープー言いましたよ、お父

さん、大人なのになって。お弁当があるのに、ジュースとかお菓子を買ってほしかったのね。

思いどおりになるシステム 思いどおりにならない自然

大分市内の高校から東京の大学の工学部に進学し、卒業してシステムエンジニアになりました。東京には学生時代から、全部で11年いました。とても楽しい仕事でしたが、大手の会社で女の人が長くいるのは難しいかな、と思えてなんとなく辞めました。しばらく福岡にいて、前の会社からの依頼を受けて一人で仕事をしていました。そのころも楽しかったですね。

その後、帰るつもりはなかったんですが、家族の事情があつてくじゅうに戻って……、気づいたらホテルの仕事を継いでいました（笑）。まあ、両親は亡くなる直前まで、無理して継がなくていいと言ってくれてたんですが、「いつ捨ててもいいんだ」というのが、二人の言葉でした。

それでも11年前までは、やらなくちゃいけないという義務感でやっていました。それがある日、環境省の方と出会って、自然に対する強い想いを聞いていたら、すごいなあと感じました。それならば、うちもここにあっていいから自然のことでできたらいいなっていうふうになるようになって。それから、私もだんだん自然のことを知るようにな

春は黒、夏は青、秋は赤、冬は白。季節ごとに私たちの目をひきつけるくじゅう連山。その中に星が生まれると書いて「ほっしょう」と読む山があります。九重町で登山客を迎え入れて70年になるという九重星生ホテルの安部智子さんを尋ねました。ロビーに入ると凛とした空気。壁には季節の花々や鳥たち、国立公園の解説が張り出され、自然への想いが真っすぐに伝わってきました。

あべ・ともこ／大分県玖珠郡（くすく）九重町出身。東京の大学で工学を学び、システムエンジニアに。九重町に戻り両親が開業した「九重星生ホテル」へ。2018年代表取締役となる。環境省のレンジャーとの出会いをきっかけに「自然と人の架け橋となるホテル」としてくじゅうの自然や環境保全の取り組みなども伝えている。自ら案内する満月の夜のタデ原温泉散策も好評。



九重星生ホテルの館内で、タデ原やくじゅうの自然、四季の楽しみを伝える手作りの掲示物。安部さんたちの、くじゅうの自然をいとおしむ心が伝わってくる。

なって、お客さまたちにも伝えたいという想いが湧いてきたんです。仕事がどんどんおもしろくなってきて、こういうふうにやりたい、ああいう風にやりたいと考えはじめたとき、「ちゃんと継ごう」と思いました。母が亡くなる少し前のことです。

私、もともと人嫌いなんです。子供のころ、よその子供と子供同士で関わってないせいか、そういうふうになんと接しづらいか、わからないんです。初対面の人と会うときに、「今日は天気いいですね」と言った後、言うことが見つからず黙る。でも、学校ではおとなしいほうでもなかったんです。おかしいですよ（笑）。多分、人と関わりあつて一緒

に仕事をするとか、適当に合わせるのが、苦手だったんでしょうね。だからプログラミンの仕事は、自分の思いどおりに動かせるのが好きで、もうすごいおもしろかった。

自然は思いどおりにならないけど、それは納得できるんですよ。自然を見ていると、人間がそんな大したものではないっていうのがわかります。自然のすごさ、良さ、あとは怖さを最近よく感じます。大雨が降れば本当にすぐ近くまで土砂が流れてきたし、屋根が飛んだこともあった。季節がおかしくなっているなども感じます。

この場所も年々暑くなってるんですが、寒暖差が大きくなっている。この夏は昼間は日が出るけど30度まで上がって、夜は16度ぐらいまで下がるのが頻繁にありました。動物や鳥が鳴くタイミングもずれているし、花の咲



8月下旬のタデ原湿原に咲いていた花々。

き具合も違ってきている気がします。お客さまからは、「くじゅうは涼しいわね」と言われますが、今はこういうふうですよとお伝えしていくことも、一つの使命かなと思います。

ホテルを

「くじゅうの自然を伝える施設」へ

15歳から家を離れて30代までずっといなかったし、戻ってからもほとんど外に出なかったの、この地域の人を知らなかったんですよ。だから、11年前の、環境省のレンジャーの方との出会いは本当に大きかった。自然に対する思いがあふれていたし、お金のためではなく、自然のために人生をかけてるなって感じました。

それならば私もと、ここをくじゅうの自然について伝えられる施設にするというのが目標になりました。ホテルや旅館というより、自然や環境保全に関する施設として、「自然と人の架け橋」として、やっていきたいと思っています。

くじゅうには本当にいい人が多い、素晴らしい人が多いと思います。みんな自然を守ろうとしている。それに地域を活性化させたいという想いを合わせて、両輪で前に進もうとしている。ここは宿泊施設なので営利目的ですが、環境省やビクターセンターは非営利。自然を守るために働いているのに、みなさんうちの話も聞いてくれて、協力してくれます。だから私も、営利だけで済ませないようにし



くじゅうの自然を語るとき、瞳が輝く安部さん。

ようと思っています。なんかちょっとかっこよすぎますが、民間の施設ではあるけれども、営利だけを目指していません。

父と母もよく、「お金は追いかけたら逃げていく」と言っていました。7年前に母、4年前に父が亡くなっていましたが、今は両親のいろんな言葉が頭の中でたくさん蘇ってきて、それを思いながらやっています。父と母のおかげで今やっていけています。

満月夜のタデ原、小さい花や鳥 私の「好き」がたくさんある

こんな私ですが、実は人を喜ばせるのがすごく好きなんです。自分が感動したりすると、みんなに教えたくなる。今はそんな気持ちです。すごいあって、今あそこに花が咲いているんですよとか、この鳥が鳴きはじめましたとか言いたくなる。

それと同じで、満月の夜は、お客さまを近くタデ原湿原へ案内しています。影ができ

るくらい明るくて、空の色や木々の緑、タデの緑もわかって、本当にきれいなんです。街中では見られない景色ですね。これをみなさんに知ってもらいたくて始めました。ただ雨が降ることも多くて……。いくら月が明るくても前後の日は案内しないし、晴れた満月の夜だけ。それでも、このために来てくださるお客さまが結構いらっしやいます。

ほかにも、ネイチャーガイドさんをお願いして、秋と春にここに泊まる1泊2日の登山ガイドツアーをやっています。初心者の方が対象です。くじゅうはどの山も自分で登ろうと思ったら登れる山ですが、やっぱり登山ガイドさんと一緒に登ると見え方が違うので、一緒に登ってほしくて企画しました。

今、宿泊代金の一部をくじゅう地区管理運営協議会に寄付しています。くじゅうの自然を守っていくこう、きれいにしていこうという会です。お客さまにはチェックインのときに説明書きを添えて案内しています。そして、大まかな数字ですが年間これくらい寄付したというのをお伝えしています。

みなさん国立公園だから来るっていうのはなくて、自然があるところを求めて来られます。それでも国立公園は、環境省さんをはじめいろいろな方が自然を守ろうと頑張っている場所なので、その中にいますよということを知ってもらいたいですね。

ここが世界中で一番いい場所だと思っています。本当にいいところだと。だから、荒らされたくないんです。SNSでバズって人が

いっぱい来るのではなく、くじゅうが好きな人だけが来てくれればいいなというふうに思っています。

今くじゅうは、山としてはオーバートリズムだと思います。人はもう十分集まっているので、あとはうちも含めて各施設で、人手不足の中でも、手伝えるときだけでも自然保護に手を出せたらいいなっていうところなんです。野焼きにしてもなんにしても焼けているのを見てよかっただけじゃなく、みんなで草原を守っていることも知ってほしい。だからこそこちらがあんまり伝えすぎると、ちょっとおこがましくなるので、そこは文字だけにしたり、ほんの少しお話をしたりと心がけて、でも知ってもらいたいなと思っています。

タデ原を歩いてたとき、私も初めてなくら本場に近い距離に、ホオアカがいたんです。

よ。橋桁の上に乗って、一生懸命鳴いてたんですね。人が通ったら逃げると思うじゃないですか、それが全然逃げないの。すごいと思った。安心しているんじゃないか、みんなが守りたいと思っているのが、わかっているのかしら。ふつう鳥が逃げないなんて、ないですからね。

ここは本場に「小さい」ところが、いいところだと思います。花もリアルに小さいんですね。まだ自然に興味がなく歩いてたときは何も気づかなかつたんですが、興味が出てくると「あ、ここに、あそこに」と気づくようになりました。いろんな花がやっぱりちっちゃくてね、本当にかわいいです。

うちから一番近い山は、「香掛山」です。私も大好きな場所です。てっぺんの岩の上に座ると、風がとても気持ちいいんです。へなちょこの私も登れるところなのでオススメしています。

季節では、春が一番好きですね。みなさん秋の紅葉がいいと言いますが、冬が長いせいか、芽吹き始めたときのいろんな緑、一色じゃなくて、赤い緑、黄色い緑があって、そういうときがいちばん好きです。

くじゅうのいろんな人たちと話をするのも、やっぱり楽しくなってきたので、人も好きになってきていると思います。昔は人嫌いでしたけどね(笑)。お客さんも大好きだし、仲間も大好きです。自然を大切に思う仲間がいるから、私も頑張れる。本当にいい人がたくさんいます。



香掛山山頂からのタデ原湿原の眺め。周囲の木々にも守られているよう。



タデ原湿原の夏の夜空。左の高いほうが三俣山(みまたやま)、右は星生山。天の川も肉眼で見える。

聞き書き
植木三雄さん

くじゅうの草原環境を守るために 必要なのは人の絆、すべては愛



久住高原で長年農業と畜産を営んできた植木三雄さん。農業のために牛を飼い、牛の飼料として牧草が必要と、広大な草原を維持してきました。阿蘇くじゅうではこのような草原を**牧野**と呼び、同業者の組合で野焼きを行ってこの牧野を守ってきました。現在は子牛の飼育に特化し、土地の一部を観光業や飲食業に貸し出す植木さん。草原に携わってきた経験とこの地を守るために必要なことを聞きました。

うえき・みつお / 1951年生まれ、大分県直入郡(なおいりぐん)久住町(くじゅうまち)出身(現在は竹田市)。中組牧場代表取締役社長。農家6人きょうだいの下から2番目。幼少のころから牛の世話など家業を担う。関東の大学で電気工学を学び、卒業後帰郷。農家を継いで畜産に転向。子牛の病気を防ぐ超早期母子分離システムを確立。畜産農家に休日を作るヘルパー組合を考案し、普及のための講演も行っている。

牛も子供も農家の労力 朝も夜も働いて鍛えられた

畜産ってというのは農業に絶対必要やったんよ。昔は機械がないけん、牛さんが田んぼ耕して、その堆肥を畑や田んぼに還元する。今みたいに子牛を販売するんじゃない動力のため。だからこの農家にも牛さんがいて、みんなが草を必要としていた。子供も労力やったんよ。朝5時に起こされて牛の餌やりして学校へ行く。帰ったらまた牛を張っちゃったね。親がそれだけ厳しかったし、すべて自給自足で、そうせんと生きていかれん時代やった。体力、気力は結構鍛えられたわな。貧乏して苦勞をするっていうのは、後からプラスの意味で効いてくるんよ。一時は親を恨みよったけど、今となっては感謝する。この強靱な身体と精神はそういうので鍛われた。

特に我が家はね、周りに比べたらもう一年中仕事。女の子も掃除したり洗濯したり、家族一丸となって家を守っていきよったからこそ今がある。振り返ると、周りで子供が遊んじゃったところとか、ほとんど家がなくなっちゃるもん。経営をうまくやりきらんで、親が出稼ぎから帰ってこんかった。守りきれんかったちゅうかな、生存競争やったけん。昔は自治会単位の競争もあつたけん。隣の村に負けるなとか、つまらん根性があつたんや。学校は一クラス50人ずつくらいいて、休み時間になつたらすぐワーツてやりだした。大概ガラスが割れて、先生もおおごとやったわ。なんちゅうか修羅場やな(笑)。時代やけどね。弟の嫁さんなんかこの話でゲラゲラ笑う。

6人きょうだいで上2人が姉さん、私は下から2番目。大家族で厳しく育つたのはやっぱり糧になつちよるね。今もくじゅうにいるのは自分でもプライドやわ。子供も後継いでくれたし。先祖は大分市内から脇差しをつけてきたらしい。そういうことで婆ちゃんも自慢しよった。ここに来たときは、入植者みたいな感じやったんやな。ほかに植木の姓はない、だから異端者みたいな感覚が備わつちゅうんかな。

私は三男やし、跡継がんでもいいけん好きなことしていいと親が言ってくれたけん、大学で東京に行ったんやけど、校舎が小田急相模原で、もう空気感がこと全然違うやん。

農業から畜産に転向 草地に補助金は出たけれど

とにかく俺は帰ってくじゅうに住むんや、その意思が強くて帰ってきた。工学部で就職も引く手あまたやったのにまったく受けんかったんよ。それも一つの運命で宿命よ。帰つてきて、青年団とか農業青年連絡協議会とかいろいろなグループにボンボン入って、仲間がいっぱいできた。リーダーになつて引つ張つてな、結構尽くしたんやわ。みんなとつながつて、いろいろ仕掛けをするのが大好きやったんよ。やっぱ若い連中が地域を守らんとな。

親と一緒に農業したとき、百姓ちゅううのは「百姓百品」でいろいろしきらんといかんと言われてな。百品作れちゅう話よ。いろんな技を持つてるのが百姓じゃって。つまらん理屈やけど。牛を飼い、米を作り、シイタケを作り、ピーマンなど野菜を作り、毎日朝から晩までもうめちやくちや忙しかった。その割にお金が残らんや。親父の言うことを聞いてたら、自分の好きなことせんうちに体壊す。うちのにも楽しめたいと思うて37、38歳かな、まず野菜をやめた。ほんで一気に入ん増頭することにしたんよ。

牧場の草地改良が1974年ごろにあった。国の補助事業で牧草を改良して植えて、食料自給率を上げて、地域の牛の産産を盛り上げようって。くじゅうのあつちこつち、阿



初乳後すぐ母牛から離すなど植木さんが考案した「超早期母子分離システム」で、すくすく育つ植木牧場の子牛たち。

蘇もそうやけど、草地改良に大きな金かけたんよな。

そのときは親父が中組牧場の社長をしよつて、地域のリーダーやった。農家組合員も55戸ぐらいいたんよ、それが現在、組合員は18戸。国の思惑と違つて、途中でリタイアする人が出てきた。草地も、一回バットと改良したら何十年もそのままでもいいもんじゃなく、10年も保たんてどんどん荒れていく。もう一回掘り返して、種時直して植え直さんと。最初だけ国からポーンと7割、8割の補助が出るんやけど、10年もたつと草地は収量が落ちて、機械も老朽化して、もうその牧場自体の経営が成り立たん。そういうことで、組合員が内輪採めすることも起きてきてね。牛飼いが好きじゃない人はやめていった。それが悲しくてね。

それでも、草地を維持管理せないかん。昔は朝から晩まで大鎌持つて草刈りしていたのからすると、今は雲泥の差。大型機械が



植木さんの義兄、浅川和憲さんの版画「久住高原の放牧Ⅱ」。久住高原で放牧が行われていたころの風景を描き、第64回日本版画会展(2023年)で東京都知事賞を受賞。

どんどん入ったんで、管理するのも80馬力、100馬力というトラクターでブワーッとやる。もう人の何十倍の能力やわ。どんくらい面積あってもアツという間に終わるしね。コストはものすごくかかるけど、そういうのにも順応して、人を残していかと。そして絶対に、有畜農家にちゃんと管理してもらわんと、あの草地は守れんわ。

観光業との連携と 野焼きの継続が草原の要

いい話もあって、観光業というのが入ってきた。今のところ、うちは草地をワイナリーと乗馬に貸してるんやけどね。ほかに、土地を貸してくださいますところがある。

昔は、よそ者は人るなとか言ってる、何もかもアウトやった。今からはそういう人たちとともに、観光客も仲間にして、地域を愛してもらわんと。一緒に守っていこうっていう人



「次が残らんことには何も守れない。仲間を作ることが肝要と思いがちや」

地域の絆を深め、くじゅうの 自然を次代へつないでいく

県の補助でヨーロッパ10日間の視察旅行に行ったとき、スイスで超感動した。そこら辺で酪農をしている人たち、標高が高いと大変やろ。標高の高い観光地など、そこで観光税があつて、それを補助金で還元している。そこで昔ながらの酪農をしている人たちにもね。産業を観光として守って、ちゃんと生活できるように国や自治体が保証している。こんな感じの感覚を持って環境に向き合っていかと。牛飼ってる家に泊まって、朝、乳牛を見てたら楽しそうにしゃべってたよ。カラランとカウベルを鳴らして、風情があつた。観光立国の本当の意味を考えて、目先のことじゃなく長く続くものを目指していかと。ヨーロッパは滞在型で1週間とか10日とかの休暇とって過ごす、あれこそ「休日」と思うんや。湖畔にテント張って家族で1週間滞在



標高850m、くじゅう連山の裾野に広がる久住ワイナリーのブドウ畑。大自然の恵みを受け、日本ワインコンクールなどで受賞も。

間の条件も、作っていかないとと思うんや。自分たちだけじゃ守れんところも出てくるし、観光業はもう絶対に欠かせん産業になる。自然を守るためにも協力してもらって、もちろんこつちも協力するし、ウインウインで後の100年、200年に環境を残すよう、つないでいかないと。

そのためには、組合員もしっかり向き合っで、環境愛、自然愛というか、まあ人間愛もなんやけど、絆をちゃんと作りながら後に継いでいくことが必要不可欠。環境に還元しながら、みんなの絆を強くしていくっていうかな。そのくらいしないと自然環境は守れんよな。特に畜産関係は草地とか面積が広いやろ、100ヘクタールぐらいあるけんな。

それと野焼きやね。野焼き作業は昔から経験してるんやけど、この環境を守る最善の方法よ。後もきれいになるし、虫の駆除にもなるし、草花も新しく生える。ちよつと危険は伴うにしても安全性を担保すれば、それが一番必要。そういうところにこだわって今もずっとやってるんやわ。草地を貸してるワイナリーや宿泊施設にも感謝されてる。そこに来たお客さんも喜んでくれたらしい。

野焼きした後は、ものすごく気持ちがいいもんね。もうなんかね、スッキリ感があるわ、ほんと。後から青い草がバーッと出てくるやん。もうなんとも言えん。命の息吹を感じるよな。だからこういうことは継続せんとね。一つの伝統技術なんやけん。火を扱うつちゅうのは風と人の動きを読み切らない

したら、本当に癒されて良さがわかるやろ。一過性でポンポン行って帰ってじゃなくて、身も心も癒さないと、と思うね。そのためにも方向性を作って、休みをちゃんと長く取れるように変えていくのが大事と感じる。

この「くじゅう」がいちばん奥まっちょるけん、山に登ったり散策してゆくり過ぎして、良さがわかってくれたらね。空気を吸ってもらうだけでもなあ、ありがたいけん。朝起きたとき、「生きてる」って感じてくれたら、それだけで全然違う、感覚が変わると思うんや。人間って環境で変わるけん、ここで阿蘇山見て、祖母山を見て、空気が吸うて、そしてらもういろいろ吹っ飛ばんやねえかと思ってるな。

ワイナリーと乗馬もあるけん、活用をイメージしてる。それに地域の人が中心となつて、一緒に守っていくつちゅう気持ちが大変。ちゃんと自分たちが守るんやって意志が統一されたら、日本も変わっていくと思うんや。くじゅうに生まれて良かったなつてつくづく思う。あとは孫たちが地域に残ってくれて、できれば環境に関わってくれたら、もうなんもいことないね。とにかくつないでもらわんことには物語がでんので。うちの組合員もそうやけど、なるべく次につなぐ方策をして、これ以上人間が少なくならんように。昔のようにバトルするんじゃなく、今からは絆を深めんと守れん時代になってきよる。みんな自覚してくれよなつていう気はするんやわ。まあだから、すべては愛ですな。

かん。それを扱いきるリーダーの資質も必要。わあわあ言うだけの鳥合の衆で集まったら、すぐトラブルになるし危険。火はどこでも飛んでいくけん。ああいうのと向き合うことこそが、自然と対話するような感じやわね。

畜産農家に休日を作る ヘルパー組合を全国へ

何でもそうだけど、私が前向きにやればやるほど、人に出会うんやな。私ようしゃべるんやけど、偶然じゃなく出会いは必然なんじゃ。気持ち前向きにすれば向いてるほど、そういう人たちに出会って気持ち通じるし、また仲間が増えるしね。そういうことを日々感じる、ありがたいと思うわ。

その一つがヘルパー組合。仲間と一緒に、日本で最初の牛のヘルパー組合っていうのを作って17年目。要するに、牛の世話是一年365日やろ。奥さんや家族を休ませんと、一人前の牛飼いと云えんよっていう話を、各地で講演しながらずっと広めてる。とにかく月に2、3日も休みを取れるシステムを作ろうつちゅう。

例えば10人集まると、一人の専属ヘルパー要員さん雇う。みんなが月に2日休みを取るんやったら、月に20日間ヘルパー要員さんみんなのところを回って働いてもらう。そのお金を、みんなで払えばいいんやけん。それで休める日が決まってくる。

長崎、熊本、鹿児島で講演して、多いとき

は組合を5、6個設立するのを手伝った。休みが取れて一人前よ。

そんな牛の側にへばりついておらんや、んや。牛さんに聞いたら、「あんたおらんけん、今日は楽や」っちな言いつたよ(笑)。牛さんのあの目を見るとな、訴えてるけんわかる。やっぱすべては愛やな。

愛があるからずっと続けられる。行き着くのはすべてそこ。地元愛とかね。草地に新しい企業が来たら、その人たちが愛するね。敵じゃなくて「仲間や」って話をすればうまく回らず。日本は今からそういうところが結構大事になるんやないかな。地元はどんどん疲弊しよるし、本当に限界集落になるやろ。一緒に助けてもらっていかんと、自分たちだけじゃ動きがつかないところある。国の商売も大事やけど、国土保全とか守ることに力入れていかんと、怖いことにならんやわ。



毎年3月ごろ行われる久住高原の野焼き。写真提供/竹田市観光ツーリズム協会



牧場から見るくじゅう連山の景色が一番好きという植木さん。「くじゅうに抱かれているように感じる。本当に美人さんや」



「ここは一日中楽しめます。お弁当を持って遊びにきませんか」

まず野焼きを続けること。そして草原を60年前の植生環境に

アクティブ・レンジャーの契約期間の後、九重ふるさと自然学校に入って2025年で12年目です。草原環境の保全活動を担当しています。セブナイレブン記念財団のセブンの森という事業で、日本の美しい自然や貴重な生態系を地域のみなさんと一緒に守っていく活動を全国19ヶ所（2024年度末時点）でやっていて、その一つがこの大分です。

ここは草原景観が地域の宝なんです。草原を守るために、飯田高原野焼き実行委員会という野焼きをしている団体さん、あと大分県、九重町、当財団の4者で協定を結んで、一緒に草原の保全活動を行っています。野焼きは資金がいるし、人手もいるし、道具も必要なので、協定を通じて支援し、野焼きが継続できるように取り組んでいます。

やっぱり、野焼きしないと草原の維持は難しいんですね。危険も伴いますが一つの文化

でもあって、草原に火をつけるのも一つの技術です。そういったことも伝承して、次世代にどう引き継いでいくかを地域のみなさんと一緒に考えていきたいなと。地域に子供はいらなくて、小学校も全校50人もいない。違う地域からボランティアの方を募るのも案としてあると思いますし、あとはやっぱり、地元の方にもっと携わっていただくよう理解を深めていきたい。

野焼きの仕方は場所によって違うし、編成も全然違うんですね。ここは、野焼き実行委員会に所属する団体に入らないと野焼きに出れないんですよ。各団体で野焼きの仕方を教わった人だけが参加できるスタンスでやっています。自然学校の野焼きボランティアも野焼き講習会の受講が必須です。事故につながってはけませんから。もっと関心を持ってもらって、実際に参加してもらえような体制づくりを考えていかないと、野焼きの継続は難しいだろうと思っています。

今の草原は主に野焼きで維持されています。昔は野焼きに加えて、牛や馬を放牧したり、草を刈って餌にしてたんですけど、今は放牧も草を切ること自体も少なくなりました。それだけだとどうしても、スキが優占する草原になってしまうんです。草原の背の低い植物は競争に負けちゃって、花を咲かせられなくなる。そうなると、草原の植物の多様性が低く、いろんな植物が花を咲かせられない草原環境が衰退します。場所によってはスキが伸びてもたくさん花が咲いている場

所もあるんですが、くじゅうのこの辺を見渡すとスキばかり元気になっている場所が増えてきているのを最近すごく実感しています。

昨年、阿蘇の草原を見に行ったら、草刈りをするのでスキの勢いをちょっと減らし、明るい環境を作って咲く花を増やす活動をされている団体さんがいました。すごくおもしろいなと思って調べてみたら、山口県の秋吉台や信州長野のほうでも実践されている方がいた。くじゅうでもそういうことをすれば花が戻ってくるんじゃないかなと感じて、やはり始めたところですよ。本当に多様性が戻るか私にもわからないので、まずやってみて、実際に植生調査をして、それを見ながらまたどうするか考えていく。時間もかかる取り組みになるかなと思います。

今って、70代の方たちが若いころに見ていた草原と違うんです。花の咲き方や密度が。昔はお盆など草原に花を摘みに行ったりです。当時の話を聞いて、地元の方どういいう草原に戻していくのがいいか話しています。だいたい1960年、1970年代ぐらいがいいんじゃないかなと。秋の七草のオミナエシやカワラナデシコ、ほかにマツムシソウも咲く風景かな。今、シカが増えて草原の植物を過剰に食べる被害も出ているんですね。自然学校でもシカが入らないように柵を設置して貴重な草原の植物を守っています。昔は暮らして草原がなくなっていたから草原って維持しやすかったけど、今はそのつながりが減りました。シカの対策もしないとい

受け継がれて、活動できていることにすごくいいなと思っています。

タデ原のことや生き物、野焼きのことなど、自分たちが伝えたいことを自分たちの言葉で、観光客にガイドしています。キッズガイドですね。大人はフォローするだけで、何をやるかは子供たちが考えて実施する活動です。交流事業で、他の地域で発表したりするんですが、自分たちでサッと原稿をまとめるし、本当に頼もしくて成長を実感します。地域の過疎化や子供の人数が少ないっていう心配な点はあるにしても、今いる子たちがまた新しい子を連れてくる。一人ひとりを見ると、中には最初なじめなかった子が、年を追うたに成長して、リーダーみたいになってくれたりとかですね。ちょっと感傷に浸ることが、たまにあります。すごいなと思う。多分こうやってくじゅうへの愛や思いが受け継がれていくことで、野焼きや今困っていることも、何か方策が見つかって、うまいことつなげていけるのかなっていう気はします。

国立公園の今と未来のために

僕は草原の保全に携わりたくて、くじゅうに来たんで、地域のために草原を残せるように、何かこう自分も力になれたらと思っています。地域のみなさんと、どうやったら野焼きを継続できるのかとか、安全に行えるのかを一緒に考えながらですね。まず今できるこ

けないし、野焼きや防火線整備もしないといけないし、草原を守るのは本当に大変で、力が掛かりますね。

頼りがいのある チームタデ原の子供たち

チームタデ原は、地元の子共たちがタデ原湿原を守ろうと自主的に作ったクラブなんです。小学4年生から上は中学3年生まで、10年続いています。僕が関わった最初の子たちはもう22歳になります。10年目で新メンバーが10人ぐらい入って、これまでで一番人数が多いんです。すごくうれしかったし、先輩たちの「守りたい気持ち」が今の子たちにも



野焼きの継続が草原の景観を守る。写真提供/九重ふるさと自然学校

とを考えて、行動に移していけると、形にできるといいなと。

自然のことって複雑で、この大切さをいかにわかりやすく伝えるのかが難しいですね。だけど考えているうちに、自然はどんどん移り変わっていつちゃうんですよ。ちょっと目を離すだけで、もう季節が進んでいく。待つてくれなくて大変です。

この自然環境もそうですけど、文化を残すために、野焼きは必要だと思います。野焼きをしないまま20年、30年たつと草原って森になっちゃうんです。そうなると昔の人たちが築いてきた景観もそうだし、文化も廃れてしまう。ここは本当にいいところなので、残したいんです。今は、暮らしが草原と関わりづらくなった。草原をどのように守り、国立公園としての価値を継続していくか。環境省や地域のみなさんと一緒に考えていきたいですね。



敷地内の草原などには81種類のチョウが生息。「チョウの調査・保全活動も任務」と大きな虫捕り網を自在に操る指原さん。



チームタデ原による「キッズガイド」。写真提供/九重ふるさと自然学校

編集後記

立ち止まったときの風の心地よき。本誌の取材前に取材者から「風が違う」と聞いていたものの、東京にいたときはイメージができていませんでした。取材で阿蘇のカルデラの中に来て驚いたのは、火口の荒々しさとは対極して、そよそよと吹く優しい風。全日ハードスケジュールの取材にもかかわらず、この阿蘇くじゅうの風は、私たちの心を落ち着かせました。

阿蘇くじゅう国立公園は、国立公園の指定から90年以上たちます。そのため、本誌、『火山と草原、つながる人の営み―国立公園ものがたり―』で取材した6組のみなさまは、生まれたときから国立公園の中で暮らしてきた方々ばかりです。しかし、全員、国立公園だから守る、というよりも、自分たちの暮らしを支えてくれているこの自然だからこそ、この自然に感謝し、活かす、守ることを意識して活動されてきました。

一般的に「自然」というと手付かずの原生林が残るような大自然を想像しますが、この阿蘇くじゅう国立公園に広がる草原や湿原は、まさに人の手によって「維持してきた自然」です。この景観や生態系を守るために、毎年、野焼きを行い、この野焼きによってこの地域の人々が一つにつながっているような印象を受けました。

野焼きは一人ではできません。秋に行う輪地切り（防火帯作り）も、多くの人手を要します。また、高度な技術も必要となります。人と連携する必要がある、重要な文化です。今回取材したみなさまは、人との縁をとっても大切にされている方ばかりでした。このように多くの人と連携する文化があり、それに携わっているからこそ、全員穏やかで人との縁を特に大切にされているように感じました。地元への愛、自然への愛、人への愛、それらの愛を感じられるのも、阿蘇くじゅう国立公園の心地よさだと感じました。

カルデラの中に安定した集落を形成している場所は世界でもここだけだといわれています。きれいな水、おいしい食べ物、心地よい温泉など火山の恵みを享受しながら、火山について学び、保全活動を行う。本誌の制作に携わり、「火山とともに暮らすこと」の本当の意味を知ることができました。本誌を通じて、取材者のこの地域への愛が、より多くの人々に届くことを願います。

最後になりましたが、本誌をここまで読んでいただいたみなさま、そして取材にご協力いただいた阿蘇くじゅう国立公園とともに暮らすみなさまに、心より感謝申し上げます。

株式会社オールアウト

阿蘇くじゅう国立公園 火山と草原、 つながる人の営み 国立公園ものがたり

発行月 …………… 2026年3月第1刷発行
発行元 …………… 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館
TEL 03-5521-8271
https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/
株式会社オールアウト
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1
APLACE恵比寿南3F
https://corp.allabout.co.jp/

企画・編集元 ……………

全体管理 …………… 土居里佳
編集主幹 …………… 土居里佳
デザイン進行 …………… 吉田拓実（一般社団法人ドット道東）
アートディレクション …………… 名塚ちひろ（一般社団法人ドット道東）
デザイン監修 …………… 鈴木美里
デザイン …………… 川内栄子

執筆 …………… 村上三千雄（VILLAGEUP）
永田知子
撮影 …………… 久我秀樹（久我写真事務所）
イラスト …………… 井上愛美（Casoch合同会社）
校正 …………… 白尾典子
写真提供 …………… 池辺伸一郎
森本幸司
NPO法人竹田市観光ツーリズム協会
九重ふるさと自然学校

九州・沖縄

